

みみずく土偶 3. 授業用の情報（先生用）

1. 文化財・東京国立博物館について

東京国立博物館（トーハク）は日本で一番古い博物館です。「博物館」というのは、世界中のいろいろなモノを展示しているところで、たとえば、恐竜の博物館やおもちゃの博物館などいろいろな博物館があります。トーハクは、昔の人がつくったモノ「文化財」を展示している博物館です。

トーハクで展示している「文化財」は、日本や世界中の国々の歴史や美術に関わるもので、たとえば、はにわ、絵、やきもの、彫刻、仏像、刀やよろいかぶとなどがあります。今日皆さんに見てもらうのは、トーハクにあるとても有名な土偶です。この土偶は2000年以上前に作られ、ずっと土の中に埋まっていた。明治19（1886）年に土の中から掘り出されたもので、トーハクでは「考古展示室」というところに展示しています（注1）。皆さん、考古学ってきいたことがありますか。「考古学」とは「古」い時代の人びとがくらしのあとや、掘り出されたモノから、そのころの生活や社会・文化について「考」え、それを今の社会に生かすために「学」ぶことです。

（注1）東京国立博物館では定期的に展示替えを行っています。展示予定は東京国立博物館 WEB サイト（<https://www.tnm.jp/>）をご確認ください

2. 時代背景など

縄文時代は今から約1万3千年前から1万年間続いた長い時代です。

今から約1万3千年前に氷期が終わり、温暖化が進むと海面の上昇によって今の日本列島のかたちが出来上がり、人々はむらをつくって集団で暮らし始めました（注2）。弓矢で動物をつかまえたり、魚や貝を取ったり、木の実などの自然の食べ物を採る生活の中で、いろいろな道具が作られ始めました。火にかけられる土器（うつわ）が作られ、煮たりたいたりすることができるようになったため、それまでに食べられなかったものが食べられるようになりました。また、食べ物をたくわえたることも出来るようになりました。この時代の道具の特徴は、立体的にかざられたデザインに優れたものが多いことです。取っ手や注ぐ口がついたもの、縄を押し付けたり転がしたりしてもようをつけたりしたもの、道具を使って線で絵やもようを描いたものなど、自分たちの生活を彩るためにたくさんの道具が作られました。この「土器」に縄を押し付けたもようがついていたことから、「縄文時代」と呼んでいます。土偶も生活の中で生まれたもののひとつで、土でつくられた人形（ひとがた）です。土偶は女性をあらわし、安産や子孫繁栄、豊かな自然の恵みを得ることを願って、特別な時（祈りの儀式など）に使われたと考えられています。

（注2）研究に基づいた数字で年数を記載しています。ご使用の教科書に併せて年数を変更してください。

3. 作り方

いくつかの大きさの粘土の塊を組み合わせて頭や体、手足など形作ります。土偶の胴の周りには、胸と肩からおへそにかけて粘土紐が貼り付けられ、腰にはのこぎりの歯のような文様「鋸歯文（きょしもん）」が、足の部分には縄の紐（なわひも）を転がして付けた「縄文（じょうもん）」があらわされています。「縄文」は縄のより合わせ方や回数、太さなどによってさまざまな種類がある、縄文時代の名前の由来となった文様です。

4. かたちやデザイン

この土偶は大きな頭の部分に対して身体は薄く作られ、肩から伸びる短い両腕と対照的に足は長く作られています。自分では立つことができません。おそらく、手に持つか、何かに立てかけて使われていたと考えられています。顔はハート形にふちどられ、丸い目と口は薄く伸ばした丸い粘土をはりつけてあらわされています。この顔の表現が動物のみみずくに似ていることから、みみずく土偶と呼ばれています。当時の人々のファッションを知る材料として土偶の姿が参考にされることもあります。頭の大きな突起は、結った髪や、櫛（くし）を表しています。大きな耳にも、粘土で丸く何かが表現されています。これは、今でいうピアスのように耳たぶに穴をあけ、そこにおおきな耳飾りをはめ込んでいる様子です。製作当時は全体的に赤く塗られていたと考えられています。（縄文人は、ベンガラや朱などの赤い彩色を効果的に用いていました。赤の色は血の色や火など、生命力を象徴する重要な色とかがえられ、儀礼に使われた特別な土器などに多く使われています）

5. 道具としての役割

祈りの道具。日常生活の中で使う道具ではなくて、特別な時（祈りの時など）に使うために作ったものと考えられています。生命を生み出す女性の出産が無事にできるようにという説、そのほかにも縄文時代の狩猟や採取をする自然に頼った生活の中で、自然の豊穡への願い（いろいろな食べ物や獲物を採ることができるように願い）を込めて作ったとする説があります。

6. その他、作品情報

みみずく土偶は、縄文時代後期の後半から晩期の前半にかけての関東地方で数多く作られました。同じ地域からは、土で作られた丸い耳飾りも数多く発見されています。小さなものから直径が10センチくらいある大きなものまで様々ですが、いずれもみみずく土偶のように耳にはめこんでいたのでしょう。土偶は縄文時代のはじめ（草創期）から登場しますが、一貫して女性像として作られます。これは、女性が命を産みはぐくむことに由来し、安産、子孫繁栄、豊かな自然の恵みなどを祈る際に使われたためと考えられています。